

## 太田 光彦 映画ベスト 10

自らの好み、そして作品の質も伴っている作品を選出。選出基準は映像が美しく、

鑑賞者の魂を動かす作品であるか。そして何より面白いか。

中国、インド映画などまだまだ未鑑賞の作品が山ほどあるが、とりあえず現時点でのベスト。

### 1位 ゴッドファーザー 1972年 F・コッポラ

冒頭の結婚式と葬儀屋の殺人依頼のシーン、洗礼式と惨殺シーンなど、光と闇の対比が何度も描かれており、そのどれもが美しい。

また、無垢なアポロニア(マイケルと結婚したシチリア人)がこの物語上での「神」となっており、彼女が亡くなった瞬間からストーリーは無秩序な方向へと進んでいく。

何度見ても初めて見た時と同じ緊張感が味わえる大傑作。



### 2位 ゴッドファーザー 2 1974年 F・コッポラ

フランシス・コッポラの芸術性がいかに発揮された作品。元々、コッポラは続編を制作する気がなかったが、パラマウントがしつこかった為、作品の内容を全権委任する約束で制作を決意したそうです。

前作は、常にパラマウントの監視下にあったので、コッポラが本当にやりたいことが表現できているのは今作。

マイケルがファミリーを巨大化する一方、父ヴィットが築き上げた権力者との家族的な信頼関係は単なるビジネスライクな関係へと変化していく。

自分へ敵意を向けた者、又は向けようとした者まで全て殺すマイケルには人間味などひとつも無い。その結果どうなるかは3を見れば分かるが、「ゴッドファーザー」シリーズとは因果応報をテーマとした大叙実詩なのである。



### 3位 浮草 1959年 小津安二郎

冒頭の空き瓶と煙突の対比シーンからはじまり、すべてのショットが美しい。

ひとつひとつのショットに寄り添うかのような斎藤高順の音楽が、情緒的な気分へと誘う。

それぞれの思いが交錯するとき、物語の美しさは頂点に達する。



### 4位 第三の男 1949年 キャロル・リード

オーソン・ウェルズの映画史に永遠に残る圧倒的な存在感。彼の登場シーンだけでも今作を見る価値は十分にある。

彼は紛うことなき悪役なのだが、得もいわれぬ魅力がある。

「イタリアではボルジア家の30年の圧政の中でルネサンスが誕生した。しかし、スイスの平和な500年の中で産んだのは鳩時計だけだ。」オーソン・ウェルズ



### 5位 東京物語 1953年 小津安二郎

土手で孫と遊ぶシーン、熱海の海を眺めながらの会話シーン、描写される全てのカットが絵画のように美しく、鮮明に心に残る。

家族の在り方、死生観などの人間の営みの細部に宿る普遍的な価値観に対して、芸術的にクローズアップしている。



## 6位 アパートの鍵貸します 1960年 ビリー・ワイルダー

これ以上のラブコメ映画は今後出ないのではと、思ってしまうほどの作品。

小道具の使い方が上手く、作中の空気感や匂いがそのままパッケージされている。



## 7位 セルピコ 1973年 シドニー・ルメット

冒頭の地中海風のテーマ曲とニューヨークの街並みの映像とのアンバランス具合が心地よく、一気に惹きつけられる。

全体的に雨のシーンが多く、腐敗を表している。

いつの時代も、権力は必ず腐敗する。

体制側はうまくそれを隠す。

時代の変わり目はいつだって革命が行われてきた。

いつか、セルピコのような人物が必ず現れる。



## 8位 突撃 1957年 スタンリー・キューブリック

これは反戦的なメッセージだけではなく、組織に属するもの達にとっての普遍的なテーマを扱っている。

役員は責任の押し付け合いで、結果として損をするのはいつも下の者。

現実にはカーク・ダグラスのような勇敢な上司はいないのでさらに厄介なのである。

ラストの歌が処刑された3人の兵士の魂を、天国へと導いてくれる。



## 9位 道 1954年 フェデリコ・フェリーニ

イタリアの農園風景、ニーノ・ロータの音楽、愛の儂さ、全てが美しい。

トマトの種を植えた彼女の心境が心に染みる。



## 10位 セインツ

セリフや音ではなく、映像で語る事ができる現代では数少ない映画監督。

映画は視覚芸術なので、ショットが美しくないと駄目。

ショットの美しさとは、光と影の入れ方、被写体との距離によって決まる。

それが、このデヴィッド・ロウリーという監督は完璧。



2021年7月10日

